

浄土

1988-12

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（兼轄省 特別授承認雜誌）第三号
昭和六十二年十一月二十五日印刷 昭和六十二年十二月
第五十四卷 十二月号





十二月の秀句

大空に伸び傾ける冬木立

灯台のまたゝき長し冬の海

酌みこぼる焼酎燃ゆる櫓火かな

高浜 虚子

富安 風生

木村 蕪城

十二月号



かの仏の光明無量にして、十方の国
を照らすに、障礙するところなし。
是の故に号して阿弥陀となす。

——『阿弥陀經』

目 次

<エッセイ>

母さんゆっくりやすんで……………合 島 近……(2)

ず い そ う (3)

晩秋に想う……………戸 川 霊 俊……(8)
——それからそれへ——

=にこにこ話⑧=

ミーちゃん、観音様になる！……………長谷川 岱 潤……(25)

「立ち止まるな善導」読後感……………渡 辺 杜 水……(15)

《特別寄稿》

須弥山の世界(三)……………後 藤 真 康……(17)
——存続上人「世界大相図」を読む——

(木) (下) (隆) (一) (随) (筆) (集) <21>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(31)
——我が思い出に住む犬たち(7)——

◇◇特別連載③◇◇

法然上人と中里介山(下)……………須 藤 隆 仙……(38)

表紙絵 小林治郎画

エ
ッ
セ
イ

母^{ばあ}さん ゆ っ くり や す ン で



合^{ごう} 島^{じま} 近^{ちかし}

(電気タイムス社長)

母^{ばあ}さん、とうとう逝^はつてしまったね^エ。満九
十一歳、決して欲は言えない齡だし、苦しん
だようすもないから、いかに強いつながりだ
と言えども、ま、納得すべきなんだろうね。

どう？一生を終えた感想は？

郷土^{ごうし}の流れを汲むらしい母さんが、どうし

てこんな山奥へ嫁いできたのか、いまさら詮
索するのはよそう。僕もかすかに覚えている
母さんの実家が、提灯張りなどしていたあげ
く、とうとう一家を引き払わなければならな
くなったのと、なにか関係があるのかも知れ
ないね。

親父は頑固だったね。それに飲んべえだった。だけど働き者だったね。だいいち鋼鉄のように丈夫だった。母さんがあまり丈夫でなかっただけに、親父のあの働きがなければ、戦中戦後の混乱期は、とても乗り越えられなかったよ。

母さん、僕にはね、自分を慰める想い出がいくつもあるよ。その一つは、いうまでもない、母さんの死境脱出だよ。母さんが、あのまま逝ってしまったら、その後の僕は、どうなっていたかわからない。

いまから三十五年前、当時僕は上京後満一年、ようやく僕自身の身の上についたショックから立ち直りかけていたときだった。

ショックというのは、かろうじて得た役所の椅子を、肺疾患の前科があるという理由で失ったことだ。就職難時代の失職、それに肺病再発の恐れ——、ほんとにまいったよ。

ところが母さん、それが母さんには、僕よりもっと大きなショックだったんだね。知ってるよ、この心配がもとで病氣になってしまったことを……。母さんは、僕が遠からず死んでしまうと恐れてくれたんだね。無理もないよ、当時まだ、肺病は死病だったんだもの。

役所のあげた理由はこうだった。「この職場は、ホコリだらけの元簿を扱うので、ただでさえ肺病の巣、だから転職をしないと、せっかく治ってる病氣が再発する。」肺病の前科は、レントゲン写真に歴然だった。そう言えば、子供の頃から、わけもなく気持ち悪くなるが多かったし、高校時代は、夜中や授業中に、急に鼻血が出たり、目くらみすることもしばしばだった。

母さん、察するところ、母さんは、僕の生命について、特別の心配をしてくれていたんじゃないかい？ というのは、僕の兄妹は、

上から一人おきに早世している。そして順番通りだと、僕は永生きしないことになる。自分で言うのもなんだが、母さんの僕に対する特別の愛情みたいなものを感じたのは、こうした気持ちの現われだったのかも知れないね。この子だけが、どうも健康がすぐれない、と思つてたところへ、ついに病気の宣告、母さんには死刑の宣告のようにきこえたんだらうね。もうすこし状況をくわしく知らせておけばよかったよ。

僕のほうは、幸い製薬会社の職工にありつけたし、病氣も、なるほど役所の言う通り快方に向つてゐるらしく、以前のように、気持ちの悪さが襲ってくることもなくなつていた。翌春、希望の大学（夜間）にも入れて、どうやら先が見え始めていたのである。

兄から知らせをもらつて、すぐに汽車に飛び乗つた。急いだので、朝の三時頃着いてし

まい、車も電話もままならないときだから、三里の道を歩いて帰つた。

まだ暗いうちに、びっくりさせるといけなから、兄嫁にそうつとようすをうかがい、十分に明けてから対面した。

母さん、僕は、あのときの母さんの姿を忘れないよ。まさに死境の人だった。異様にくつきりしたアバラ骨の間から、ぶくつ、ぶくつと、心臓が不規則（に見えた）にふくらんではひっこむ。いまにも止つてしまいそうな頼りなさだった。

「元氣だったね」それだけ言つてつぶつた目から涙が……。

あのときのつらさは、なんとも言いようがない。ちやうど一週間、祈つて耐えた。

母さんは僕に「死なないから東京へ戻れ」と言つた。そして僕にも、「このまま死ぬ筈がない」と思えてきた。このままじゃあんま

りだ、と思ったのである。もしかしたら、僕の元氣なことをじかに確認できて、病根が除かれたのかも知れないね。

その後、日に日によくなったと言う知らせは、ほんとうにうれしかった。そして四年後、初めての東京見物。僕は学校出たての文なしで、案内役ではあるものの、なにからなまでに親父頼り。でもほんとに楽しかった。ま、親父にしてもたとえ夜学とはいえ、伴が、山村では初めての大学卒ということで、気分はまんざらではなかったように思う。

皇居や泉岳寺にも参った。夜のお江戸の遊びも体験(のまねごとを)した。テレビを初めて見たのもこのときだよ。食事をすると、母さんはきまって箸袋を集めてたね。そして妹に手紙で報告していた。「えねえいちけい、と書いてあった」と妹が笑ったのも憶えてる。羽田での写真を見て、「飛行機に乗るお客さ

んでないことはひと目でわかる」とみんなで大笑いしたこともあるね。

親父ときたら、トイレを見つけると、必ず入ったね。トイレと言えば、母さんがドアの開け方がわからない、と大きな声で呼ぶものだから、僕は女性用に飛び込み、冷汗をかけたことがあるよ。

歩くときは、よく手をつないだね。母さんが病氣あがりて視力も弱いからだが、つないだ手のぬくもりに、僕は幼ない頃の感触を味わっていた。横断歩道で、ちゃんと信号に従っているのに、大きなトラックが近寄ってくると、握った手をぎゅっときつくしてこわがるところは、まるで子供みたいだったよ。

東京へ来たのは計四回、うち一回は、かなり長期間、おばあちゃんの面倒をみたがるうちの子供たちの相手もしてくれたので、この面で思い残すことはない。金のかかることは

何もしてやれなかったが、僕のほうも、年に何回となく帰郷したので、その点心残りはない。

山仕事や田んぼの手入れに関しては、仕事自体がきつかったせいも、母さんと一緒でもあまり楽しんだ記憶がない。一番楽しい思い出として残っているのは茶摘みだよ。母さんは、毎年のように僕を誘ってくれたね。母さんのちっちゃい頃のことを含めた諸々の話は、なんべん聞いても興味深かったし、二人して、知ってる限りの唄をうたったりしたよね。夕方になると出てくる藪蚊も、さほど気にならなかったし、摘み終るのが惜しいような気さえしたものだ。

先年出した二種のレコードも、母さんが喜んでくれる筈、という気持ちで根底にあったことを白状するよ。

一つは、地元と特産のミカンを賞讃する民

謡調、僕の詞に、かの大家・古賀政男先生が曲をつけられ、実力歌手・大川栄策が唄っているのは、僕にとっても楽しい実績になっている。

もう一つは、母さん、あんたの米寿のときの、僕のアイディアだよ。ことさらお祝いをするのはまずいというので、ユニークなおみやげとして考え出したものだ。二人ともたいへん唄が好きだろう。そして、この世での二人の共通の大事件と言えば、僕より七つ年上の姉さんの死だ。しかし、暗くなつてはおもしろくないので、幼ないときの思い出を、なるべく明るく表現したつもりだ。これは金をかけられないから、曲も自分でつけ、自分で唄い込んだ。先だって、NHKのラジオでも二回ほど流してくれたが、畑で聞いたという兄嫁が、「涙が出てしかたがなかった」と言ってくれた。むろん母さんが一番喜んでくれ

たし、僕には、それがなによりうれしい。

ま、唄はともかく、母さんが喜んでくれるから、という気持ちで、僕の気持ちや行動をリードして、その結果、たくさんのすばらしい先輩や友人に恵まれ、実に楽しい人生を送ることができている。僕にとって、"母さん教"のご利益あらたかというところだ。

急を聞いて、すっ飛んで帰ったが間に合わなかった。正直言つてこれは残念だ。母さんが僕を待ってくれない筈がない、と思つていたから——。でも、これはもう神様のご意志だろう。

火葬場での肉親との別れはつらい。僕はじつとしてるのが嫌だったから、山に登り、火葬場の上へ出た。そして煙突からの煙を見つめながら、母さんの昇天を見届けようと思つた。しかし、見ると煙突はない。そう、母さんは見る機会がなかったかも知れないが、

新しい火葬場は最新式で、暗いばかりのイメージがかなり薄れてるよ。

あの日は小雨が降っていた。そして、木々の新芽が鮮やかだった。新芽というのは、晴れた太陽の下より、小雨の中のほうがより鮮やかだねえ。

一面の新芽を見ていたら、母さんが僕に、「わたしや十分過ぎるほど生きたよ。そして大地に還るんだよ。ほら見てごらん、みんなあんなにみごとに蘇ってるじゃないか」と諭してるような気がした。

天寿とし還土の母や新芽雨 近

母さん、僕もいずれはそちらへまいる。そのときはまたよろしく頼むね。

ご苦労さまでした。どうかゆっくりやすんでください。

晩秋に想う

—それからそれへ—

戸川 霊俊
とがわ れい しゅん

(京都・左京区西住院住職)



十一月に入ると、夕べのとぼりの下りる頃、真如堂の十夜法要の双盤の音が、ばあんばあんと夕闇をついて響いてくる。京の秋も深まり、立冬の声を聞くころには、そう此の年も暮れるのだという思いが一しおである。高く低く、遠近によってその音は、浄土寺に鹿ヶ谷に、岡崎・吉田そして聖護院のむらむらのあたりに一種の佗しさを伝えてひびく。

五日の初夜から十六日の晨朝まで営まれるこの鈴声山真正極楽寺の引声阿弥陀経のお十夜法要は、暮れを彩る京の年中行事の一つである。

小学生のころを想い出す。学校から帰ってくると、カバンを玄関に投げやって、直ぐに真如堂に急ぐのが楽しみだった。いろんな屋台店が、門前から隣りの、この黒谷の高麗門のあたりまでたちならぶ。境内にも、覗き絡繰りの小屋がけが、群参の人達をあてこんで

呼びこむ声も喧しい。毎月の北野の天神さんや東寺の弘法さんの縁日の情景に異ならない。この日だけの十夜蛸をひさぐ店。これも十夜の時だけの郷土玩具の米搗き牛車を売る店。いまは姿を消してしまつたが懐かしい思い出である。

十六日のお晨朝のあとの十夜粥のふるまいに預かつて、行末の幸を語り合いながら善男善女の群は下山してゆく。

境内の参道両側の紅葉も燃えるように美しい。

浄土寺真如町、岡崎真如堂前町、吉田神楽岡町そして黒谷町。四つの町のそれぞれの先っぽの区域だけが相寄つて形成している差程広からぬ門前は、いまに変ちぬ閑静なたたずまいを示している。南に黒谷北門、北に臨濟宗や時宗の四つの寺の並ぶ俗称四軒寺、真正面には黒住教の宗忠神社の鎮座する神楽岡、それに門前数歩にして陽成天皇・後一条天皇の両帝の御陵の存在が、静謐ということにも増して、一種の度ましい環境を生んでいるのであるか。

明治の終り大正の初頭に建てられたものであろうか。門前に、そのかみの京都びわ湖疏水の設計者田辺朔郎博士の旧邸がある。古さびた玄関の扉をあけて、内から度のきつそうな眼鏡の老博士の姿が、今にも現われてきそうだ。

平安時代、中山大納言が別墅を営んだとされるこのあたりの環境を愛して、このあたりに居を構える文人は今に絶えない。

私の乏しい知識だけでも西田哲学門下の伊達四郎・相原信作、そしてその妻たりし志賀

直哉門の閨秀作家網野菊。歌人鈴鹿俊子女。この方は山内のお生まれだったと思う。小学校の日を想うと、殆んど私の年とかわらない。

近くに在りながら隣山真如堂のお十夜法要に詣いるのはもとより、日々の訪れも寥々であるが、今年は、テレビの案内のまま、吉祥院に武内住職丹精の菊華の見事な展示を門外から、そっと見せて頂いた。

真如堂のお十夜法要につづいて京はお東の報恩講である。

東本願寺の山門の主柱には、二十二日からの報恩講法要の立看板が掲げられる。北陸から、東海から信の一念に燃えた御同朋御同行の門徒の方達が、ご開山聖人の膝もとに、群参して、京はひととき他力念仏の埒塙と化すると言っては言い過ぎであろうか。

少年の日、私は父から、黒谷は、総本山の大法要の時よりも、本願寺の法要の折の方が真宗の門徒の参詣が多いのだということを聞かされている。

じじつ、ここには親鸞聖人の木像が蔵されているし、明治の初めころ迄は、聖人像をかかげて北陸門徒の地を伝道しまわったとの伝えもある。

親鸞聖人を宗祖と仰ぎ、その宗祖の師匠としての法然上人を元祖と崇める。親鸞聖人は一宗を開いたのでなく、お師匠法然上人の選択された本願念仏の道を、ひたすらに信じ奉じた弟子親鸞。宗祖と元祖との信仰の間には髪一筋の違いもないと説き聞かされている門徒達には、七高僧の中でも、一番法然上人が慕わしく、宗祖親鸞聖人が岡崎草庵から師法然上人の居ます黒谷の僧房に教えを求めて足を運んだその黒谷と名のつく山が、憧がれの

聖跡の最たるものとなっているのでなからうか。

法然上人修学究道の地比叡の黒谷の名を元とし、新たに白河禪房のほとり、栗原ヶ岡に黒谷の名を附したこの御山は、名称そのものも、黒谷上人の呼称と結ばれて、真宗門徒の信心の対象とされたのであらう。

ご開山聖人は、一宗を立教開宗されたのではなく、師法然上人の浄土の教えをあやまらず、そのままに伝承された顕真実浄土一筋の聖者であったと、師を仰ぐ弟子親鸞のお氣持そのままに聞信して、浄土の寺に訪ねて来られる至純の篤信の門徒の姿を、若き学窓の日、松蔭了諦先生——この方は西本願寺派の学匠であられたが——に、浄土宗と浄土真宗のかかわり方について聞かされた想い出と思ひ合わせて嬉れしく思うのである。

やがて今年もまた、親鸞聖人の草庵の旧跡なる岡崎御坊からの道筋を、黒谷の丘へ、門徒の団体が住職に率いられ、別院輪番さんに導かれて登ってくることであらう。

朝の早いとき、それは前夜黒谷の麓の岡崎別院に泊ったとき、口に称名を絶やさない一団が暁の清澄の空気について勢至堂の御廟への石段を上ってゆく。

車駕東幸——しゃがとうこう——

天皇が東に行幸されるということ——しかし実際は都が東京に遷ってしまったことである。「一時、東京に行幸さただけで、京都は今も都である。いつか旅から帰ってこれるであらう」と。

車駕東幸という、もっともらしい表現で、都を失う当時の京都の人間の失望を慰める意図で、当時の京都府が編みだした言葉であるが。

建都千三百年が、やがて口にされ、また首都分散が世上の声が挙がるにつれて、京都市民の意識には、京都御所の存在が強くクローズアップされてくる。

「しゃがとうこう」小学生の頭には難しい聞きなれない響きの言葉である。

——明治天皇が東京に行幸されるというその月、京都御所の御門には東幸を阻止しようとし、むしろ旗を立てた市民の群が続々と集まる。それを宥めるために、天皇は「京都は自分の故郷である。必らず帰ってくる」と約束された——小学校の記念日に、講堂で諄々と講話してくれたのは「京都坊目誌」という尨大な編著を成した京の糸商を営む郷土史家の郁五堂碓井小三郎翁であった。

そして、——東京に行幸されているだけである。京都が今も都であることを忘れるな——と声をはげまして降壇した翁の言葉は、忘れるともなく忘れられず、私くらいの年齢の者には、今もなお耳朶に残っているようである。

明治は遠くなりけりで、すでに百年を超える時の経過である。旧いものは、新しいものが次から次ぎと生起する毎に消え去ってゆく。しかし、山彦のように、私の心に残る街の一歴史家によってかき立てられたわが故郷京都にまつわる歴史の一齣は、私には容易に忘れ去られるものでない。

私ひとりのみでなく、年輩を等しうする京都生れの者の胸には、かすかではあるが脈々

と、今も伝えられていることであろう。

京都御所のほど近く鴨川を東に渡るうとする丸太町橋の土手町寄りの橋の袂に「京都女紅場社」の石標が建てられてある。明治の新政とともに、この国で初めて創立された女子教育の社である。「女紅場」の名称は、今日では祇園の舞姑さん達の技芸研修の場の名称に用いられているが。

やがて、女子教育の場としての女紅場は、時経て、京都府立第一高等女学校と変遷し、さきの大戦終戦後は、今の男女共学の鴨沂高等学校となるのである。

明治維新の前夜、会津中将松平容保が、初めての京都守護職として都に在った日の宿舎は、徳川の隠し砦の異名のある黒谷であった。

奥女中らには塔頭の一院が宿舎に当てられた。天保生れの私の祖父は、霞棲とも梅溪とも号し、岡崎に住む香川景樹の桂園派の流れを汲み、歌道の嗜みもあり、茶道の心得もあったので、暇には彼女らの求めに応えて手ほどきもしたようである。

教養ある彼女らには、すでに時世の転換が悟られていたのであろう。鳥羽伏見の戦いは敗戦となり彼女らも、残兵とともに黒谷の宿舎を立退くとき、祖父らに「新しい時代となつたら必ず京都にもどって参ります。京都の教育のお役に立ちたい」と述べて、東海道筋はすでに薩長を中心の官軍の制圧下にあるので、北陸路を故国へ去っていったという。

会津藩は、徳川譜代の諸藩が、本家と同じく殆んどが浄土宗であるが、めずらしく神道——吉田神道を奉じている。立藩精神は藩祖保科正之以来、尊皇斥覇の山崎闇斎学派の崎

門学である。ここに養われる会津士魂につらなる会津婦道。

彼女らも、また藩の危機に、長刀つらねて若松城下官軍を迎え戦った。これは戊辰戦史を彩る悲壮な最後の一頁であった。

時代の幾多の苦難を越えて、車駕東幸に寂れる京都にもどってきた彼女らの名を、新しい女紅場の教師の名簿の中に見うける。

新しい祖国の精神はキリスト教主義の教育によらねばならぬと、アメリカから帰期して、かつての古き王城の地こそと京都に学校同志社を創設したのは安中の旧藩士新島襄であるが、よく彼を扶けて今日の日本有数の私学を創りあげた内助のひと、新島襄夫人八重子こそは、若松城下に娘子軍の先頭に立って薙刀をふるって戦った会津の女丈夫山本八重子である。

新島八重子の兄山本覚馬も旧会津藩士。官軍に囚われていた六角の牢獄から処刑の直前に放免されるも再び会津の地に帰らず。終世を京都の治産と新島襄夫妻のよき協力者となつて、同志社教育の興隆に力をいたしたのである。

若王子山には、校祖新島襄夫妻のと並んで、彼の墓碑が建っている。

若王子山の紅葉黄葉も、いま美しい最中であろう。

教育というもの——京で言われる反権力とは、反東京とは——素因を探ってみたいのである。

「立ち止まるな善導」読後感

淨土宗西山深草派

大本山円福寺法主

渡
辺
杜
水

(岡崎市岩津町)

作家寺内大吉氏は、本誌に大作『念仏ひじり三国志』を前に連載されている。それは「法然をめぐる人々」と副題され、すでに五巻ものとして刊行されている。

次いでまた中国の善導を主人公としての大作、これも刊行されるであろうが、五十回連載の完結にあたって、いささか感慨あり。

さきの「法然」は日本での浄土教念仏宗の

元祖であり、今度の「善導」は中国での浄土教祖である。そして法然は五百年の時と国を距てての師と仰ぎ高祖と呼ぶ。我々は両祖と称してこの二祖を本尊の両脇に奉安する。作者寺内氏は浄土宗大吉寺の住職であるから、この二祖にかしづく浄土の念仏者である。

さて「立ち止まるな善導」の題名について
第一回から不審に思い、その依りどころがど

ここにあるかを注目してきたが遂に最後のところで、これが主題であったかと私なりに判断した。しかし作者の意中はどうか、それは分らない。

善導の書は五部九卷、中でも観經の四帖、その眼目は三心、その譬喩が二河白道である。そしてこの大河小説の結びになっている。

副主人公とも云うべき惺良が暎の中の二河白道を念仏しつつ懸命に辿る姿、刺客三人の群賊悪獣も追跡できず、水火の河岸を立ち去ってゆく。対岸の岸には阿弥陀仏の化身たる善導が西方の仏となつて「来たれ」と喚んでいられた。これが大団円の終幕となつている。

二河白道の喩は観經教化の中心であり、善導教義の大眼目である。その教えを奉ずる主人公惺良が念仏の行人となり万人の代表となつて白道をゆく。「立ち止まるな」の声は西方の弥陀であり東方の釈迦である。また釈迦、

弥陀二尊の教えを信順し宣布する善導の声でもある。二河の白道、それを歩く念仏者、それを教える善導、そして第三心、廻向発願心の趣旨などから、題名である「立ち止まるな善導」は西方浄土に立ち止まるな、彼岸と此土とを往復して大衆を引導せよ、という弥陀の呼び声であつた。文に「一到安養弥陀国還来穢国度人天」とある。題名をこれによつて、漸く知つたと思う。

観經の真中で説かれている三心は一心であり、經全体に通ずるものである。その比喩が二河白道であつて、これも經全体の教えであり浄土教そのものの教喩である。だから善導の教ゆる念仏同行人も「立ち止まるな」と励まされ、再び帰り来たれと叱咤されているように思われる。「善導」と「念仏者」が一体となつている題名だとも思う。これは読者の自由であり法悦である。

特別寄稿

須弥山の世界（三）

―存統上人「世界大相図」を読む―

後藤 真康

（東京・江東区円通寺住職、農博）

世界の始めと終り

大相図の上左半分には世界の始まりと終りについて詳しい解説が書いてある。その原典は俱舎論である。その概略は以前紹介したが、大変面白いので詳しく紹介する。

この世界には『因縁会合』によって始めと終りがある。世界の歴史には、『成住壊空』の『四劫』があつて興廃止どまることがないという。「劫」について落語の「寿限無」では愉快な説明をしている。天人が三千年に一度下界に降りてきて大きな岩を撫でる。その摩擦で岩が擦り減つてなくなってしまうまでが一劫だという。でたらめかと思つたらこういう比喻も仏典にあるのだそうである。要するに想像を絶した長い時間を劫というのである。囲碁で際限のない打ち手を「劫」というのもここからきている。以下、大相図の文章にそつて説明しよう。

世界の『壊劫』のときには火、水、風の『三災』が一度に起こってすべてを破壊してしまふ。こうして『二十小劫』の間、世界は虚空のみとなる。これが『空劫』である。空劫が終わると『成劫』になる。その最初には大梵天宮から夜摩天宮までが生じる。ついで、最下の空中に微少の風が生じ次第に上の方へ固まっていって風輪が生ずる。風輪に車軸を流すような大雨が降って水輪ができる。これを風が打って、牛乳の上に皮膜が生じるように金輪ができあがる。金輪の上に降り積もった水が宝種をつくり、それを風が選別して山や海をつくりだす。これらができあがつて初めて生命（有情）が生まれる。まず『二禪』の最上層の『光音天』から一つの生命が『大梵天』に生まれ変わってきてその王となる。諸天衆がこれに従い、順次下の天へと生まれ変わっていった、最後に地獄や餓鬼にも生命が誕生した時をもって『成劫』が終わり、『住劫』となる。

胆部州（人間世界）の住人は始めは姿態円満で光明を帯び、空中を自在に飛翔してあたかも『色天』（色界）にいるように『喜楽』を飲食していた。この時『地味』が生じて馥郁たる香りがただよい、その味は美味であった。一人がこれを取って味よい、他の人もまねて食べるようになった。そうなると段々体が重くなり、最初は無量だった寿命も短くなってくる。光明も消えてしまつて代わりに日月が現れる。

地味を食べつくすと『地皮餅』が生じたが、これも競って食べつくしてしまった。この頃、森林も生じ、耕せずとも『香稻』が実つたのでこれを取って食べた。穀物を食べると体に滓が溜まるので、これを排泄するため体に二道を生じ、ここで初めて男女の差が生ま

れ男女の交わりも行うようになった。段々人に怠け心が育ち稻を取って貯えるようになり、これを巡って争いも起こるようになった。そこで一人の徳有る人を『田主』として治めさせた。耕作が始まると貧富の差がおのすから生じ、犯罪も起って刑罰が必要となる。人の性質は悪くなる一方で殺す、盗む等の十悪が競って起こり、人々は獵師と野獸のように憎みあい、戦争、飢饉、疫病を防ぐすべもなかった。寿命は段々減じて、ついに十歳となった。これまでを『初劫』という。

この時、空中に声がした。「汝らの悪行の報いにより人間の種はつきようとしている。何故、善行をおこなわないのか」。人々は大いに恐れ勇猛心を起こして十善を行うように励んだ。かくして人間の寿命は再び増加するようになった。しかし、八万歳を上限としてまた減少する方向に向かう。こうして人間の寿命が一回増減するのを『小劫』と言い、これを二十回繰り返すと住劫が終わり、『壞劫』の時を迎える。なお、現在は二十小劫の九劫目に当たるという。

住劫の終わりに、胆部州の一人が師も無く法に従って自然に（無師法然）初めて禪定を得、『離生喜樂甚樂甚靜』となえる。余人はこれを聞いて初めて禪定に入り、命が終わると梵天に生まれかわる。こうして四州や諸天の住人は因縁によって順次上方の天に生まれ変わり、あるいは他の世界の地獄等に生まれ変わり、ついに梵天の住人も地獄の住人も居なくなり、総ての山や海がみな燃え尽きてしまう。これが『壞劫』で、歴史はふりだしへもどることになる。四劫の長さはそれぞれ等しく、これを『中劫』という。四劫を合わ

て世界は地中海周辺に限られていたように、古代インド人にとって世界はインド亜大陸であった。したがって初期の閻浮提図は多分に空想をまじえたインド地図である。やがて、仏教の東漸につれて西域、中国、日本が加わる。日本では桃山時代以後、西欧との交渉が始まると、西欧からの知識を交えた閻浮提図も描かれるようになった。鳳潭上人の「万国掌菓図」(一七一〇)もその例である。ただしこれは従来 of 天竺中心 of 図 of 左や上にヨーロッパやシベリヤを形式的に付け加えたものにすぎない。文化、文政時代となると先に書いたように西欧の新知識がかなり普及し、司馬江漢の「地球全図」(一七九二)など最新の世界地図も刊行されるようになった。これに伴い「坊さんの説く世界図なんて古くさい」などという声も起こったにちがいない。存続上人はこれに対抗して、「新しい閻浮提図」を書いてみようと考えられたのだと思う。まだ上人は二十歳代、円通寮主となる前の気鋭の学徒であられた頃のことである。

上人はこの図の作成にあたって従来 of 図にない新しい構図を発案した。図 of 最上端に閻浮樹を大きく描き、その下に七層 of 森林を描いた。そしてその直下に従来 of 天竺中心 of 世界図に代えて最新の世界地図をはめこんだのである。ただし、世界は平面であるという説と調和させるため、南北アメリカ大陸を図からはぶいた。「地球全図」にはアメリカ大陸がちゃんと描かれているのをあえて無視したのである。そしてオーストラリアには猫牛州と付記し、図 of 右隅に勝猫牛州を僅かにのぞかせた。

七層 of 森林に重ねて大きな『日宮図』が描かれ、解説がついている。太陽は半球形で、

下半分は下界を照らし上は平面で日宮があるという。下から三分の一の部分は、天文、氣象について正法念經等に基づいて若干の解説を付し、地動説を批判する文章も載せた。そして先に紹介した「世界一周は不可能である」という解説でしめくくっている。

このアイディアは残念ながら失敗であったと私は思う。まず絵画としては一貫性に欠け、文字通り木に竹をついだ構図となった。世界地図がリアルだけに菩提樹や日宮との違和感が大きすぎる。地動説批判や世界一周不可能説は面白くはあるが、正直に言って議論になっていない。要するに信仰と現実とがあまりにも入り乱れているのである。ただしこれは現代人の目から見た勝手な批判である。当時の知識人として、伝統的知識と西欧からの新知識を対決させ、融和させるためには仕方なかったのだとみる外はあるまい。

同じ考えでもっと戦闘的に仏教世界観を擁護しようとした円通上人の「仏国曆象編」は、閻浮提図に一年遅れて刊行された。さらに文化十年（一八一三）には「須弥山儀図」がでる。存続上人は閻浮提図にすぐ続いて須弥山図を刊行せれるつもりだったのだと想像される。したがって、円通上人に先を越されたとの思いが強かったことであろう。上人はそこで論で想を改める必要を感じられた。閻浮提図での反省もあったことと思う。西欧の知識と技術争うのではなく、やはり信仰は信仰として正しく伝えていかなければならない。こう考えられて、新しい須弥山図「世界大相図」を構想されたのだと思う。そして十年の間において、先に紹介したような須弥山図の最高傑作とも言える「世界大相図」が完成したのである。上人はさらに七年において「天竺輿地図」を刊行された。これはまさしく諸經典に基づく

古代インドの地誌図であり、空想の仏蹟遍路の図である。その詳細な記載を、一つ一つたどって行く余裕は今の私にはない。しかし、いつの日かまたこの図をたよりに頭のなかで古代代インドを巡礼して見たいとは思っている。

むすび

仏教の宇宙観である須弥山世界を訪ねたついでに、現代科学による宇宙観も紹介しておこう。この方面の学問も日進月歩している。太陽は宇宙ではごくありふれた恒星の一つで、水素爆弾と同じ熱核反応で水素をヘリウムに変えながら、膨大なエネルギーを発散してきた。星には寿命がある。太陽は今から四十五億年前に生まれ、今後五十億年は輝き続けるだろうという。弥勒菩薩の現れる五十六億七千万年先までもつてくれるか心配だが、その前に地球が水素爆弾で消滅することがないよう祈りたい。太陽は「銀河系」という渦巻き状の星雲に属している。これを「銀河系宇宙」とか「島宇宙」とかいつている。銀河系に属する星の数は約二千億で、宇宙には少なくとも三十億の星雲があるという。有名なアンドロメタの大星雲は銀河系のとなりにある別の島宇宙である。須弥山を太陽系にたとえることもできようが、私にはアンドロメタ大星雲のような巨大な渦巻き星雲のように思える。最近の説によると、今から約百五十億年前、全宇宙のすべての物質は一か所に寄り集まっていた。それが何かの理由で爆発的に膨張しはじめた。これを「ビックバン」という。膨張の初期に恒星や惑星や星雲が生まれたのだそうである。宇宙はいまでもどんどん膨張

しつつある。このまま膨張し続けるのか、どこかで縮小に転ずるのか、それが現在の論争点だそうである。いずれにしても人間の想像を絶する長時間での話である。

地球のような惑星もありふれた存在で、銀河系だけでも二百億以上の惑星があり、その中には生物のいる星があっても不思議ではない。地球には数限りない種類の多様な生物が住んでいるが、生命を支配する基本的な法則、遺伝やエネルギー産出の方式には人間も他の動物や植物も全くかわりはない。一方、今の宇宙に存在する物理的定数がちょっとでも違っていたら現在の世界は生まれなかったろうといわれる。たとえば引力がもう少し大きくければ、すべての物質は引力で引っ張りあって離れなくなる。水の沸点がもう少し低ければ地球上の水は全部蒸発してしまう。その点、いまの宇宙は生命の誕生に大変都合よくできているのだそうである。まことに「人の生を受けるは難く、やがて死すべきものの今いのちあるは有り難し」(「法句経」)である。

こうしてみると、須弥山宇宙観も現在の宇宙観も、宗教を支えるうえではたいして変わらないように思えてくる。どちらも宇宙はまことに広大であり、人間は実に微少な存在であることを教えてくれる。宇宙の歴史に比べたら人の一生は取るに足りない。しかし、その巨大な宇宙を動かす法則が、おなじように人間をも支配している。そしてその微々たる人間の魂は、ときに宇宙全体を飲み込む程に大きくふくらむことができるのである。

仏のお姿の上に須弥山を重ねても、星雲をかさねても、合掌する心に変わりはないと思うのである。

(了)

ミーちゃん観音様になる！



「ミーちゃん、チーちゃん、コロちゃんの様子がおかしいの、ちょっと来て」

お母さんの緊迫した声が家中に響きました。十二月に入り、朝方は凍て付くような風が肌をさします。ミーちゃんとチーちゃんは寝巻の上にセーターをはおっただけで外に飛び出しました。

コロのところにはすでにお父さんとお母さ

はせがわ
長谷川 岱 潤 じゅん

(東京・品川区戒法寺住職)

んが来ていて、心配そうにしやがんでコロを覗き込んでいました。コロはミーちゃんの家に来てもう十五年にもなるオスの柴犬とビグル犬の混ざった中形犬です。ミーちゃんとチーちゃんにとっては、生まれたときからずっといっしょに遊んできた、いわば兄弟のような犬なのです。

「お母さん、コロ死んじゃうの」

チーちゃんが泣きそうな声で言いました。

コロの体はもう硬直し始めているのです。

コロに毛布を掛けてあげながら、お母さんは目を真っ赤にして、コロをなでていますが、何も答えてはくれませんでした。

「コロはね、ミーちゃんやチーちゃんたちの倍も生きているんだよ。人間の歳だともう七十五歳ぐらいなんだよ。もうお浄土からお迎えが来たみたいだね」

「コロ！ コロ！」

お母さんが突然大きな声で名前を呼び続けました。

ハア、ハア、やっていたコロの舌が止まってしまったのです。

お母さんはコロの毛布をとると、動かなくなったコロを力一杯抱き締めました。目からは大粒の涙があふれ、体を小刻みに震わせながら泣き崩れてしまいました。ミーちゃんと

チーちゃんも、お母さんの背中にすがって大声で泣きました。お父さんも立ちすくんだまま涙を流していました。そして泣き崩れる三人を温かく見守っていました。

しばらくして、お母さんが立ち上がると、お父さんはしっかりとお母さんの肩を抱き締め、そしてもう一方の手で、子供たち二人を抱え込んで言いました。

「さあ、コロのためにお経を読んでお勤めをしてあげよう。そのまゑに末期の水をしてあげようよ。ミーちゃんは茶碗に水を入れてきて。チーちゃんはコロが入るくらいのだんボールの箱を探してらっしゃい。お母さんはガーゼと割箸を持ってきてください」

お父さんは忙しく用を三人に言いつけました。三人はそれぞれ走っていききました。三人にとっては、一生懸命することが何よりもの救いでした。お父さんは、コロの身体をブラ

シで丹念にきれいにしておきました。

「お父さん、これでいいかしら」

お母さんがガーゼと割箸を持ってきました。

「お父さん、水これくらいでいいの」

今度はミーちゃんが帰ってきました。

「いいよ」

「コロ、きれいになったね」

ミーちゃんがお父さんの手をにぎり締めながら言いました。

「こんな、くだものの箱しかないよ」

チーちゃんが、半分泣きながら帰ってきて言いました。

「そうか、可哀想だけどそれでもいいよ、一時のベットだからね。それじゃみんな揃ったから始めようか」

そう言うとお父さんは、割箸の先にガーゼを付けて、そのガーゼを水に浸すと、コロの口のところに持って行き、口の周りをきれい

に拭いてあげました。

「さあ、次はお母さんだ」

お母さん、ミーちゃん、そしてチーちゃんと順に『末期の水』の儀式を行ないました。

とても神聖な気持ちになりました。そして、

チーちゃんが持ってきたくだものの箱の中に、お母さんがきれいにシーツを敷いて、そして毛布にくるんだコロをその中に移しました。

「さあ、お勤めしてあげよう。ミーちゃんとチーちゃん、コロをご本堂の玄関に運んでください」

「はい」

ミーちゃんとチーちゃんは唇を噛み締めながら、二人で箱を持ち上げご本堂に向かいま

した。
お父さんは、『愛犬コロの霊位』というお位牌を書き、正面にあげて、お灯明をつけました。

三人が神妙に坐ると、お父さんはお経を始めた。途中でお父さんが、お焼香をなさいと言いました。三人で阿弥陀様の前に行ったとき、ミーちゃんは小声でチーちゃんに「お焼香は一回でいいのよ」

と告げました。この間お父さんから聞いた話を思いだし、ミーちゃんは死ぬなんてこと絶対絶対続いてほしくないと、心の中で強く祈っていました。お母さんはずっと泣き続けていました。

「今、ミーちゃん、チーちゃん、そしてお母さんの私達四人で、一生懸命に阿弥陀様にお経をおあげして、コロのことを頼みしたから、もう大丈夫だよ。コロはきつと、お浄土に行つて、そして人間に生まれ変わってくることを思うよ。さあ、ミーちゃんとチーちゃんは学校に行つて、みんなにこのことを話してあげてください。今晚もう一度お経をあげて

あげようね」

ミーちゃんとチーちゃんは早々に食事を済ませると、真つ赤な目のままで学校に行きました。

お父さんとお母さんは、仏教テレホン相談に電話して、ペットの火葬をしてくれるところを訪ね、コロを車にのせ、早速そこに向かいました。もう少しこのままでと、お母さんは言いましたが、お父さんは、早く火葬にしてあげようといつて譲らず、お母さんも納得して、すぐに火葬することになりました。

三十分ほどで火葬は終わり、コロは小さなお骨になつてしまいました。家に戻ると、お父さんはコロのお骨を阿弥陀様のすぐ下の台に載せてあげました。

ミーちゃんもチーちゃんもお友達を大勢連れて帰ってきました。

「おばさん、コロちゃん死んじゃったんだっ

て、私たちにお参りさせて」

カヨちゃんを先頭にお友達が、入ってきました。

「有り難う、ご本堂にいるからお参りしてあげてください」

お母さんは悲しんでばかりられません。

お友達へのお茶菓子の用意で大変です。お父さんの狙いはどうもここにあったようです。

「ずいぶん大勢来てくれたんだな。これからコロナちゃんのお勤めをするから、みんなもいっしょにコロナちゃんのためにお念仏してくれるかい」

「もちろんよ、私たちそのために来たんだもん」

カヨちゃんがみんなを代表して、大声で言いました。

「有り難う、宜しく願います」

お父さんはそういうとお経を始めました。

みんなの好意に感激して、目から涙があふれながらの法要でした。みんなといっしょにお念仏をして、お勤めが終わったとき、後ろでお母さんが何度も何度も頭を下げながら、みんなにお礼を言っていました。

その晩床についてもお母さんは泣き続けていました。お父さんは優しく抱き締めて眠ることにしました。

そして三日たっても家族の悲しみは消えることがなく、ミーちゃんもチーちゃんも食欲のない日が続きました。お父さんはみんなを集めて言いました。

「十五年間もいっしょに暮してきたコロナの死は、確かに悲しい。でもいつまでも悲しんでいたらコロナも辛いと思う。私たちはコロナのためにも、力強く生きなくちゃいけないんだ、解るか。こんな話をしよう。昔インドに早離と速離という二人の兄弟がいた。二人は幼

くしてお母さんに死に別れ、その後育ててくれた継母にいじめ尽くされた。そして大飢饉がその国を襲った年、継母は二人をだまして無人島に連れて行くと、その島に二人を置き去りにして帰ってきてしまうんだ。飢えと寒さで二人はやがて生き絶えるんだ。そのときに弟の速離が言うんだ。私たちは辛いめ悲しいめに遭い続けてきた。そして最後は母にも裏切られた。今度生れてきたらこの世を呪ってやるんだって、そうすると兄の早離がその弟を抱き締めながら言うんだ。確かにそのとおりだ。でも我々が受けた苦しみ悲しみは財産じゃないか。今度生れてきたときにはこの経験を生かして、悲しみ悩み苦しんでる人のところへいって、その人の力になってあげようよ、そのほうがいいよってね。その言葉を聞いて、速離もにこって笑ってうなずいて死んでしまうんだ。そしてその顔をみて安心し

て兄も死んで行くんだ。そしてその生まれ変わりが、兄の早離は観世音菩薩様に、弟の速離は大勢至菩薩様にお成りになったんだ、というお話があるんだ」

「ずいぶん悲しいお話しだね」

ミーちゃんが興味深げに言いました。

「悲しい話しだね。でもこの話しはね、ただの昔話じゃないんだよ。早離速離はほら今のミーちゃんとチーちゃんじゃないか。悲しい心を知ってる人は、他の人の悲しみが理解できるんだよ。我々は観音様や勢至様になつて、悲しんでいる人や苦しんでいる人の力になつてあげなくちゃいけないんだ。解つてもらえたかい」

「解つた。私、ミーちゃん観音に成る。きつと成る」

ミーちゃんもチーちゃんも目に一杯の涙を浮かべながら言いました。

木

下

隆

一

随

筆

集

21

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(7)—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

昭和二十二年の年が明けて、久し振りに有武一郎を訪ねると、一郎は火鉢に炭を継ぎ足して私を迎えてくれた。そしてプロレタリア文学を読めと小林多喜二や葉山嘉樹、徳永直等の名前を挙げて、彼等の作品が後の文学に与えた影響について諄々と説くのであったが、彼の声は私の中を右から左へ素通りして行った。というのも、当時戦争中の反動で、それらしき小説や評論が数多く発表されていたが、文章は生硬で、資本家や地主、工場主等搾取する側は常に冷酷で卑劣で好色で、それに労働者はいかに対処し抵抗し勝利を勝ち得たかといったワンパターンが多かったのに嫌気がさして、プロレタリア文学ってこんな物かと軽蔑の目で見ていたからである。

無理矢理、一郎が貸してくれた小林多喜二の「蟹工船」は戦前刊行された物だったが、伏せ字の×印や、（以下○○行○○字削除）と書かれた空白が多く、殆ど小説の体をなしていなかった。

有武一郎によれば、小林多喜二は明治三十六年秋田県に生まれ、小樽に住む伯父の援助で小樽商業から小樽高商に進み、卒業後北海道拓殖銀行小樽支店に勤めた。創作活動はすでに高商時代から始めていたが、大正十五年頃から小樽の労働運動に関係を持ち始め、昭和三年「一九二八年三月十五日」、翌四年には「蟹工船」と立て続けに問題作を発表、これらの作品が国際革命作家同盟の機関誌「世界革命文学」に訳載され、国際的にも広く名を知られるようになった。昭和五年「中央公論」に掲載した、大地主の小作人と小樽の労働者との共同闘争を描いた「不在地主」が直接の原因となって、銀行を解雇された。その後上京し文学活動に専念。昭和六年非合法の共産党に入党し弾圧を逃れて地下活動に移ったが、八年二月二十日東京赤坂で逮捕され、同日夜築地署で特高刑事等の殺意ある拷問によって死亡した。享年三十。本格的な作家活動は、僅か五年余に過ぎなかったと言う。

『蟹工船』は北洋漁業に於ける大資本と軍との癒着、苛酷な強制労働から蟹工船内で起こったストライキの様子が赤裸々に書かれているんだが、ソ連の領海での操業が駆逐艦の護衛のもとで行われていたなんてことは、あまり知られなかったんだらうね。だから戦前すでに発禁処分を受け、戦時中は持っているだけで検挙されたんだよ」

一郎はそんなことまで教えてくれた。私は黒い紙で嚴重にカバーされた本を、改めて見

直した。

「この本持ってて怖くなくなつたんですか」

「そりゃあ怖かつたよ。検査されれば何されるか分からないもの。でも、これはある人の形見でね、その人の遺志を守ってあげたかつたんだ。だから僕はM島の療養所に入る時、荷物に忍ばせて持って行つた。家に置いておくよりも身近に置く方が無難だと思つて……、いざという時、処分し易いものね。ところが、ひょんなことから所長に見つかつてしまつた。『珍しい本持っているんだね』と言つて、バラバラ捲つて僕に返すと、『これじゃあ読みづらいだろう、私の持つての方が少しは増しかも知れん』と貸してくれたのが、驚いたことにカバーも何もしてない剥き出しのままの本だね。『先生大丈夫なんですか』と言うと、所長は平然として、『なあに、こんな所へ特高なんぞ来やせんよ。奴等は結核患者は虫ケラ同然で、何も出来ない非国民だと思つてゐる。奴等は人を人とも思わなくせに、結核が怖いから来ない。言わばここは盲点なんだ。だから地下に潜つる連中が逃げ込んできたら、私は匿つてやる』——とにかく珍しくリベラルな先生だつた。あの時期にリベラルな考えを持った人物に会えたことは。僕にとつては幸せだつた。出来ればあの人の許で、僕はもつと人間学を勉強したいと思つてゐるんだ」

そう言つて、一郎はM島を懐かしむように目を細めて窓の外を見た。垣根の山茶花は散り尽くし、青黒い葉が寒々と揺れてゐた。

一郎から借りた「蟹工船」を、私は読むことは読んだ。それもかなり時間をかけて……。

しかしそれほど感銘は受けなかった。いや受けようがなかったと言った方がいいかもしれない。伏せ字を埋め、削除された空白の部分の推理して理解しろと言われても、肝心の小説の筋立てすらはつきりしないのだから、中学三年生の読書力では到底不可能であった。結局本を返しに行ったのは、三月の学年試験が終わってからになった。

一郎はいなかった。

「一郎は島へ戻りましたが……」

彼の母親が出て来て言った。

「三月の初め、療養所の所長さんのお手伝いすると言いましてな」

「悪くなって戻られたんじゃないんですね」

「ええ、具合はよかったです。ただこちらにいます、何かと気詰まりなんでしょうよ」

一郎は病状が悪化して帰島したのではなく、彼の言うところの人間学を学びに行ったのだと分かってひとまず安心したが、それならなぜひと声かけてくれなかったのかという不満は残った。私が礼を言って本を返すと、

「そうそう、あなたがお出でになったらと言つてされとります。読みたい本があったら、勝手に持つて行って読め——そないに言うとりました」

「いいんですが、そんなことして」

「いつでも入って下さい。部屋はあのままにしてあります。入口に鍵はありませんけん」

勝手に入れという一郎も一郎なら、鍵はないという母親も母親だった。人間の善意を信

じて生きる宗教人のおおらかさであろうかと、私は思わず母親の顔を見つめた。すると、「ハチがぼっこり（大変）お世話になつとるようで、済みませんなあ。不愛想な犬ですが、よろしゅうお願いします」

と、彼女は私に向かって丁寧な頭を下げた。

実際、年が明けてから、ハチはしばしば我が家を訪問するようになっていた。

門の格子戸は滑りが悪く、開けるのにちよつとした骨がいったが、ハチは格子の間に鼻を突っ込んで動かし、頭が入るだけの隙間ができると、更に体をこじ入れるようにして入つて来た。器用なものだった。大抵は施錠してなかったから、ハチの侵入は容易だった。朝、格子戸が開いていて、ハチの姿が見えないこともあった。夜中にやって来て、また出て行ったのである。「ハチや、開けたら閉めてお行きよ」と母はよく冗談めかしてハチに言っていたが、それは無理というものだった。

なぜハチが我が家に来るようになったのかいまだによく分からない。来れば母は何かしら食べ物をやっていたが、ハチがそれにつられて来ていたとは私には思えないのである。後にハチのクールな目を思い出して、あれが人間不信の目であったのか、人間蔑視の目であったのか、孤独に耐えてひたすらに人間の愛情を求めていた目であったのか、はたまた日本犬特有の狷介さを示す目であったのか、飄々乎として犬を超えた境地に達した犬の目であったのかと考えると、これもまた、状況に応じて変化し、必ずどれかに該当するから分からなくなってしまうのである。

ただ私が確実に指摘できるのは、ハチは人間の愛情に飢えていたということである。六歳ともなれば、飼い主にも子犬の時ほどかまってもらえなくなるし、町を歩けば図体がでかいから敬遠される。特に戦時中は邪魔物扱いされ、時には赤犬はうまいという俗信から、生命の危険にさらされたこともあっただろう。人心が荒廃し、犬を飼うゆとりがなかったから、恋の相手にも事欠いた。山中に潜む野犬の仲間は、時々里に現れて鶏小屋を襲ったりしたが、ハチにはそれが出来なかった。脈々と流れる秋田犬の血がそれを許さなかったのである。従って常にハチは孤独だった。来る日も来る日も、ハチは気持ちよく付き合える人間に出会わないものかと町をさまよったが、所詮は無駄であった。ハチの目の色は、知らず知らずのうちに、人間不信から人間蔑視へと変わって行った。

そんな時、偶然ハチの興味を引く人間が現れた。それが私だったのである。最初の出会いで、私はイリコをハチに食べさせたが、ハチはそれまで飼い主以外の人間から食べ物を貰ったことがなかったから、面食らった。

「俺の知ってる人間の範疇からはみ出しているが、悪い奴ではなさそうだな。やっとな俺と対等に付き合える人間が現れたってことかな。まあ、しばらく付き合ってみるか」

ハチは私の手からイリコを食べながら、案外そんなことを考えていたのかもしれない。しばしば訪ねて来るようになったのは、私という人間をよりよく知るために来ているようだと気付いたのは、なおしばらく経ってからのことであつた。私はじっくりハチに観察されていたのである。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての一案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

△特別連載③▽

法然上人と中里介石（下）

須藤隆仙

（函館市称名寺住職）

剛腹無双の上人

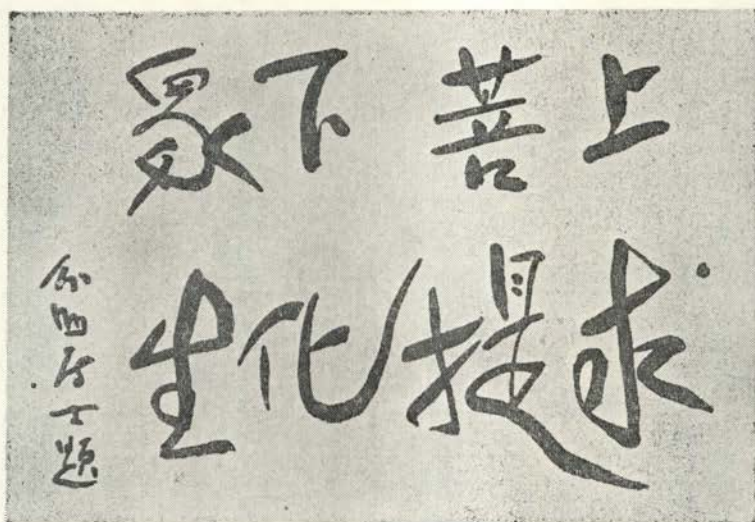
以前、増谷文雄博士が、法然上人という方は、温厚な方だということだけが伝えられているが、じつはそれだけではない。正体はまさに剛腹無双、天下に並ぶ者なきまでの豪者である、という論を発表されました。

そうでないと、あの前代未聞の新宗教を天下に向って開宣できるものではないといい、また青年の修行時代にも、真理のためには一歩も譲らぬ態度を貫き、師僧から枕を投げつけられたこともあり、師僧がまた、「良忍上

人が称名より観仏のほうが勝れているといわれたから、観仏が上である」といったのに対し、「良忍上人も先にお生まれになったからです」と答えるなど、一見不遜なような言動までしており、とてもその巍然たる態度は尋常のものではない、というのが論拠であられました。

増谷先生がこの論をご発表になられたのは第二次大戦後のことでありますが、じつは中里介石はそのような論を、すでに昭和初年に公表しているのであります。

前にも記した昭和六年刊の『法然』、その



——中里介山の筆跡——

中でちゃんと論じているのであります。その序文に次のようにあります。

「少少、文字を読むことを覚えてから今日まで、世間的交際は決して広い方とは云えないけれども、典籍を通じての古人今人の遭逢は数限りもない。その中で、あるいは一応卒業してしまったものもあり、再応はたずねる必要のない人もあるが、『法然』上人だけは別である。日本生れの人で、真実、底の知れない器と腹とを持っている人は『法然』より外に、その人もあるではあるが、私には、全く唯一ただ一人の人だといえる。今日、筆をとって、またその胸臆に別け入るに及んで、往時と同じな感激を新たにして、覚えす涙下ることもある……」

傍点は私がつけたのですが、ここがほんとうに注目すべきところであります。「真実、底の知れない器と腹とを持っている人」、そ

れは中里介山から見れば、日本人の中で、法然上人ただ一人だといふのであります。非常に大胆な発言でありますが、しかし、介山のこの自信に満ちた発言は、これも決して単なる思いつきや何かではなく、深い仏教研鑽の上から生まれた至言であることが、彼の著述・作品を具さに拝読すると、よくよく解るのであります。

ここで、こういうことをいって失礼かも知れませんが、私は、増谷先生のご意見は、介山のそれを読んで、そこに教えられるものがあつたのではないかと、こう解釈しているのであります。増谷先生は介山の『法然』を熟読されたと思うのであります。『法然』の中には、前に紹介したように、「勅修御伝」(法然上人の伝記)の要訳があります。古文で現代の人にはちょっと読みにくいこの伝記を、介山はすばらしい手法で手際よく料理してくれており、私たちが摂取するのに、まことに好都合であります。

先に話した良忍上人の話なども、原文ではあまり強い印象を受けないのですが、介山のこの要訳では、この問答の重大さがよくよく判るのであります。その部分を、左に転記してみましよう。

「或る時、法然が『往生の業には称名に過ぎた行いはありません』といわれたのを師の慈眼坊が、

『いや／＼称名より観仏が勝れている』といわれた、法然は押し返して、

『称名は弥陀の本願の行でございますからそれが勝れております』という、師の慈眼坊はなお承知しない。

『わしが師匠良忍上人も観仏が勝れているといふことをいわれたのだ』といった処が、

『良忍上人も先にお生れになったからです』と法然が云つたので、師の慈眼坊はその不遜に腹を立てた。法然は押し返して、

「されば善導和尚も、上來雖説定散兩門之益望仏本願意在衆生一向專称弥陀仏名と釈をなさいました。称名が勝れているということは明かでございます。聖教をばよく御覧になりませんか」といった。」

原文を見てみると、次のとおりです。

「ある時、上人往生の業には、称名にすぎたる行、あるべからずと申さるるを、慈眼坊は、観仏すぐれたるよしの給ければ、称名は本願の行なるゆえに、まさるべきよしをたて申したもうに、慈眼坊また、先師良忍上人も観仏すぐれたりところをおおせられしか、との給けるに、上人、良忍上人も、さきにこそ生まれ給たれ、と申されけるとき、慈眼坊腹立したまいければ、善導和尚も、上來雖説定散兩門之益望仏本願意在衆生一向專称弥陀仏名と釈したまえり、称名すぐれたりということ、あきらかなり。聖

教をば、よくよく御覧じ給はで、とぞ申されける。」

原文では、その重要さをちよつと見落しがちであります。介山の要訳は、さすがに文士としての技が生きており、その問答のさまが彷彿とするのであります。

それにしても、法然上人の、真理のためには寸分の妥協もなされないその態度は、どうでありましょうか。師僧に向つて平然と反論し、しかも、「聖教（お釈迦様の仏教）を、よくよく勉強もなされませんか」という意味のことまでいい放っているのであります。それは上人が、ただ不遜に、ただ生意氣にいったものでは勿論ないのです。大変な大変な勉強の中に、しかも念仏行の裏付けの上に、絶対の確信をもつていわれた言葉であつて、真理そのものであり、万金を超す重みのある言葉だったのであります。

その真理の中にドブブリと漬かつておられ

たからこそ、剛腹無双たり得たわけでありま
す。

この上人の剛腹無双さを見抜いた最初の人
は、じつに中里介山であった、といって過言
ではないであります。

新宗教の開祖

介山が法然上人をべた賞めする最大理由の
一つに「新宗教の開祖」ということがあり
ます。これについてはその著『法然』の中の
最初に「唯一の創立者」という一章を設け
て、詳論しております。じつに鋭い法然観で
あります。これについては本文を少し転記し
てみましょう。

「日本に於て、本・当・に・一・宗・教・を・創・立・し・た・も
の・は・法・然・の・外・に・無・い、といえは定めて異論
が・旗・出・す・こ・と・で・あ・ろ・う。徳川期以後に起
つた黒住とか金光とか、天理、丸山等の民
衆教は別として、日蓮までの日本仏教の中

に祖師と仰がる幾多の巨人がある。それ
を宗として日本独特の仏教が起っている。

いづれも其の創立者を度外して、その宗教
を語ることは出来ない。法然一人が一宗教
の創立者であつて、法然以外には、宗教を
創立した者はないと断言することは、多大
の反論を予期してかからねばならぬかも知
れない。

しかも、事實は、たしかにそうである。

試みに目をあげて日本の日蓮までの——日
蓮以後には前掲の理由で新宗教は起らない
——宗教連脈の高峰をあげてみると、

仏教伝来

聖徳太子

三論（慧灌）

法相（道昭）

天台（最澄）

華嚴（慈訓）

真言（弘法）

融通念仏——（良忍）

淨	土	——	(法然)
臨	濟	——	(榮西)
曹	洞	——	(道元)
黃	檠	——	(隠元)
真	宗	——	(親鸞)
時	宗	——	(一過)
日	蓮	——	(日蓮)

右のうち、聖徳太子は日本仏教の総府であつて、これは一宗一派の祖というよりは輪廓が違つてゐる。さて、その他の諸宗及び祖師、いずれも文明の伝達者であり、一代の巨人であつて、余流永く後世を潤わす者に相違ないが、従来の宗教伝統を全く覆へして、そうして新たな一宗教を打ち立てたものは、やはり浄土の法然の外に前後その人が無いのである。」

このように明言してゐるのであります。そしてそういう結論に至つた理由を、ちゃんと述べているのであります。それらの長文を全

部転記するわけにはいきませんので、左に簡略に整理しておいてみましょう。

①法然は五祖を仰ぎ、善導を祖述し、三部經を貴び、二尊(弥陀・釈迦)に拝跪してゐるし、恵心にも導かれてゐるのだから、その教えが新宗教だとはいへぬと反論する人があるかも知れぬが、じつは法然の宗教があつて、善導も五祖も三部經も二尊もあるのである。法然はこれらを祖述したのではなく、これらを自分の宗教の註釈として用いたのである。そう気付いてみると、法然という人、その宗教というものの本質がよく解かるのである。

②善導一師に依つたというが、善導は師というよりも、法然という大船の、最も幸運なる(どちらにとつても)水先案内者であつた。法然以前にも法然以後にも、これだけの創立者は無い。

③法然は如上の意味で、真の革命家でもある

る。日本では法然ほどの革命家はいまい。

④日本の宗教史上、法然ほど断乎として己れ以前を否定したものは無く、法然ほど確乎として己れ以後を指定した者は無い。

⑤入信の動機より、出家の経路、煩悶より得道、一宗一門開創に至るまで、その名の如く全く法爾自然で、無理というものが無い。彼は天成の平民的求道者であり、宗教的偉人である。日本において彼ほどに宗教家らしい宗教家は無い。

⑥法然は終生平民僧であり、しかも当時の宗教の第一人者として絶対的に許され、教化面ではまた、天子・法皇・皇后・中宮・門院・関白・公卿・武士・商人・土民・盜賊・娼婦に至るまで、親しく教えを説いた。こういう宗教家は釈迦以外には法然くらいのものであろう。

⑦結論としてに「おおよそ、親を信ずることなくして子というものの存在は予想されない。人間というものの存在を信ずるもの

に、どうして仏と神との実在を疑わんとして疑われよう。時あつて人々は疑うこともある。呪うこともあるが、その実在性は永遠の大事実である。法然は、疲れ、忘れ、喘ぎ、走り、呪い、怒り、昏迷転々の時代の首をとらえて、西に向け、そこに汝の衆土がある。そこに汝の親がいる。そこをのぞんで、親の名を呼んでみよ。どうして、汝が救われずにいるものかと、八十年の生涯を絶叫して、幾千万の人間に教えた。人類の世界と未来を通じて、本当の宗教家らしい宗教家、本当の僧らしき僧としての法然、彼は容易にその最大最偉の地位を下るものではない。」

よくもこれだけ法然上人のことを調べられたものだ、敬服するの外ないのであります。

法然上人の流れ

介山はまた、大変な爆弾発言ともいうべ

きことをいつているのであります。

それは、親鸞も日蓮も法然上人の法脈を継いだ者（弟子）だ、というのであります。親鸞上人は実際に法然上人の門弟でありましたが、日蓮上人もそうであったというに至っては、一見、驚くべき発言であります。ところがそのいつていることをよく読んでみると、なるほどと、うなづかされるのであります。それをいつている『法然』の「死後と法脈」という章の部分を左に転記してみましょう。

「法然の法脈を継いだ者のうち、その色彩の最も鮮かなのは親鸞と日蓮である。後の浄土宗門よりいわずれば、親鸞の存在と地位とは大きな問題となる。しかし親鸞が自ら最もよき法然の門弟であるということは自分で証明している（中略）それに反して法然より数十年の後に生まれたけれども、法然をまともの敵として討つて出でた日蓮、それが矢張り法然の門流である、というこ

とは奇怪であらう。日蓮を法然の門流といひ、逆弟子であるということは言えないにしても、日蓮なくとも法然は在ったが、法然無くして日蓮は有り得ない。見ようによつては、法然の余弊を救わんがために逆説戦法を以て日蓮が現われ、法然の南無阿弥陀仏の一本槍を借用して日蓮は南無妙法蓮華經の旗印としたものと見られる。

弟子は師にまさらずとはいわれない。後輩であるから先輩より劣るという限りもないが、宗旨宗旨としての観方は別、歴史的存在としては親鸞と日蓮は法然の門弟であり後輩である範囲を出ることは出来ない。繰り返えていえば、親鸞と日蓮無くても法然は有り得たが、法然無ければこの両者の宗教は全く有り得ない。なお例えば、恵心や善導無くても法然は必ず自己の宗教を作り得た人であるが、親鸞と日蓮は法然無ければあの宗旨の存立の原動力が失われる。

親鸞と日蓮とは、広く法の運用より見れ

ば法然を体としての両翼であり、歴史的輪廓よりは、法然を中心としての脇士の地位に見るのが当然であろうと考える。」

なるほど、もっともの論であります。宗派根情で見れば、真宗や日蓮系諸宗の人たちの中には怒る人がおるかも知れませんが、しかし介山先生の意趣はまことに厳然として、真実をうがっているわけであります。

そしてこのことは、宗派と関係ない歴史学者によって、全く科学的に論証されることにもなりました。それはかの教科書裁判などで広く知られております家永三郎博士が、この点について、全く中里介山と同じ結論を、細かい考証から実証してみせたのであります。それは博士の名著『中世仏教思想史研究』の中に、『親鸞の宗教の成立に関する思想的考察』と『日蓮の宗教の成立に関する思想的考察』という二編のすばらしい論考となつて収められております。詳しく知りたい方は

是非その名論文を読んでいただきたいのです。この著は昭和二十二年に初版が発行され、同三十一年に増補したものが法蔵館（京都）から出されております。

家永博士の論の内容をいくらかでも紹介したいのですが、あと紙数が残念ながらありませんので、簡単にしか述べられませんが、博士は親鸞や日蓮の著書・言行と、法然のそれとを緻密に比較し、親鸞や日蓮が法然の亜流であるということを、見事にさらけ出して見せております。そして次のように結論しております。「日蓮が、実は念仏から最も大なる影響をうけた思想家であつて、客観的には法然の亜流と考えてもよい位置にあること、曾て私が『日蓮の宗教の成立に関する思想的考察』に論証した通りであつて、ある意味からいえば、親鸞の思想も日蓮の思想も同じ法然から分岐した二つの枝であると考えられる」（同書二〇七頁、傍点筆者）

博士は、こういって研究を主に大東亜戦争

中になされたようであります。中里介石のそれは、すでに昭和初年に論じているのでありまして、介石の仏教を見る眼の鋭さには、ただただ平伏するのみであります。

おわりに

さて、以上、中里介石というあの異色の文士、近代日本の文芸界・思想界に多大の影響を与えた一文化人の、その思想・哲学の根底となつてゐる仏教論について、それがさらに法然上人の浄土教を基幹とするものであるということを、たどたどしく綴つてみたわけがあります。紙数の関係で舌足らずの部分が多いのが残念であります。

初めに、介石の仏教は、浄土教でなく華嚴だという方がおられることを紹介しておきましたが、華嚴というのは浄土教と深い関係にあるものなのです。華嚴の哲学では法界縁起ということをお説きまして、この世の中のもものは、人間は勿論、一本の草でも、一つの石こ

ろでも、じつは全宇宙の力をそこに集めて、しかも互いに相関係し合つて存在しているのである、と教えるのですが、さて、そういう哲学を実際生活の上はどう現わしていくかというところ、菩薩行といつて、自利・利他・即ち自分も悟り（自利）、他をも悟らしめていく（利他）、という人間道最高の境地（これを菩薩道ともいう）を進むことを教えるのであります。しかもその窮極は阿弥陀仏の浄土に往生して悟る、というのであります。ですから華嚴経には、善財童子という求道者が、五十三人の善知識を歴訪して、最後に普賢菩薩に会い、その十大願を聞いて、弥陀仏国往生を願う話が出てくるのであります。ですからこれはもう、浄土教と非常に近いものとなる、浄土教と一緒にしても過言ではないのであります。ここに面白い話がありまして、華嚴宗の本山は大仏様で有名な奈良の東大寺であります。この東大寺、明治になって去就に困り、どの宗に付属したかというところ、浄土宗

に付属したのでありました。のち明治十九年
独立して今日に至っているのであります。

そのようにして、華嚴の思想というものは
念仏になつてくる、介石はそんなところまで
も知っていたようであります。ですから『法
然』の中では、次のようにもいっております。

「往生は一定と思えば一定、不定と思えば
不定、我等は、悩みは救わるべきことを信
じ、救い主は、いずれの処にも、いかなる
形をか備えて実在し、我を現世に遣わして
苦しむと共に、これに解脱げだつと救いとを保証
し、そうして人智を以ては知るを得ざる生
存の意義に歩ましめつつあることを信ずれ
ば、法蔵比丘の誓いも、基督の十字架も、
みな現前に歴々たる実証となつて現われる
のである。三千世界のうち、いずれの処か
菩薩捨身の地で無いのは無いという。かり
に西方に向つて浄土を欣求こんぐするは、この粟

散土さんどにあつては西方が天日の隠るる処であ
り、鳥が疲れてねぐらを求むる処である。

寂滅の沈静とともに未来の希望を暗示する
こと西方に如くものはない。なんじら痛く
疲れつらん。来りてこの安楽の寂光土に安
らかに眠れよという声と姿が、まさしく西
方より現われてよいのである。現世の重荷
に疲れ悩める者にとつて、西方がまさしく
浄土で無ければならぬ。そこに救主の阿弥
陀如来が無量の寿命と無量の光明と無限の
慈愛とを以て厳守する。この信仰は夢では
ない。厳肅なる実在である。」(同書「唯一の
創立者」の章)

こうして見てきますと、中里介石こそ、真
に法然上人の浄土教を信解した人のなかの一
人ということが出来ると思うのであります。
有難いことであります。

(一) 内の引用文は、現代仮名づかに直した
ところがあります。(完)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年十一月二十五日 印刷

昭和六十三年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一十一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

◇◇1989年用新版◇◇

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円（200ページ以上 特価60円）

送料実費（300ページ以上はサービスします）

====お申込み=====

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

（振替）東京8-82187